

# 鹿児島県文化財調査報告書第72集



令和8年3月

鹿児島県教育委員会



旧島津家天神脇別邸の石蔵



紅葉双鹿図 雌鹿



松鷹図 鷹

旧島津家天神脇別邸杉戸絵

## 卷頭図版 2



山ノ口遺跡出土品  
(重要文化財 (美術工芸品))



岩川の弥五郎人形行事  
(重要無形民俗文化財)



与論城跡 (史跡)



沈壽官家茶室鶴壽軒  
(国登録有形文化財 (建造物))

## 序 文

鹿児島県教育委員会では、貴重な文化財を調査し、記録保存することにより、郷土の文化財を正しく理解し、文化財愛護思想の一層の高揚を図ることを目的として、昭和28年度から文化財調査報告書を刊行しています。

今回は、第72集として、県文化財保護審議会委員が令和7年度に実施した有形文化財の文化財調査報告2件の概要を掲載しました。

また、令和7年3月以降に、新たに国の指定及び登録を受けた重要文化財等7件の概要も併せて掲載しました。

本書が、文化財の保存・活用を図るために広く活用されることを期待します。

最後に、御多用の中を調査・執筆に当たっていただいた県文化財保護審議会委員の方々に深く感謝申し上げます。

令和8年3月

鹿児島県教育委員会  
教育長 地頭所 恵

# 目 次

## 序 文

### 第1章 文化財調査報告

- 1 旧島津家天神脇別邸の石蔵ほかと主屋内杉戸絵 . . . . . 1
- 2 岡野遺跡の人形・土馬に伴う容器について - 伊佐盆地一帯の土馬  
および人形に関する追加調査報告 - . . . . . 8

### 第2章 国指定文化財

- 1 重要文化財（美術工芸品）山ノ口遺跡出土品 . . . . . 11
- 2 重要無形民俗文化財 岩川の弥五郎人形行事 . . . . . 12
- 3 史跡 与論城跡 . . . . . 13
- 4 史跡 奄美大島要塞跡及び大島防備隊跡 附 大島需品支庫跡 . . . 14
- 5 史跡 旧集成館 附 寺山炭窯跡 関吉の疎水溝 . . . . . 15
- 6 天然記念物 徳之島明眼の森・義名山の森琉球石灰岩地森林植物群落 . 16

### 第3章 国登録文化財

- 1 登録有形文化財（建造物）沈壽官家茶室鶴壽軒 . . . . . 17

# 第 1 章 文化財調査報告



県文化財保護審議会委員 揚村 固  
県文化財保護審議会委員 植野かおり

## 【はじめに】

前報（文献1）では、旧鹿兒島藩の集成館事業が展開された「仙巖園」の南部に位置する当主別邸建築について「旧島津家別邸」として調査成果を報告し、令和7年度の有形文化財指定に至った。報告では、「2 立地」で敷地状況について簡単に触れ、「3 現存建造物」で邸宅棟と他に敷地南西部に見える「白壁の土蔵」一棟を紹介し、他に「煉瓦造りの炊事場跡」の存在を指摘して、以後「4 主屋」についてのみの調査結果をもとに「6 評価」を報告した。また末尾に「邸内の杉戸絵については評価が未了である」ことを注記して結んだ。本年度、追加の調査を行い、以下1～3を揚村、4を植野が報告する。



写真1 本邸敷地と左上の石蔵

## 1 石蔵

本報の目的は、旧島津家天神脇別邸（注）内に残る未調査の建造物等を調査して報告することである。明治43年の記録（資料1）には本邸の落成までに実施予定の「残業」が報告され、その二頁目16番目の項目に字下げで項を改め「石蔵ノ部」に三項目を報告している。「一 屋根瓦注文中」「一 外部土壁準備中」「一 内部板壁製作中」である。蔵は瓦葺の石蔵で、外壁が土壁、内壁が現況と同じ板壁である。また、新築のこの蔵が本邸と同じ明治43年中の終了予定が記されている。（資料1）

### (1) 位置

石蔵は、敷地の南西隅で本邸から距離を取り、敷地境界西側石垣に平行に位置して建造された。（写真1）



写真2 石蔵（南より）



写真3 石蔵（正面）

## (2) 建築の全体像

平屋造りの石造蔵で外壁は漆喰仕上、平入で正面から4段の石段を上り開いた両開きの漆喰扉の奥に引違戸があり内部に至る。(写真2, 3)

内壁の四方は木製板壁。南北の妻壁に換気用の開口部を開き、防犯用縦格子を嵌める。北は外開きの板戸、南には換気扇を新設している。

屋根は本来の瓦葺きを波板スレートに葺き改めている。小屋組は木製トラス式の洋小屋。(島津家は幕末から洋小屋を経験済み)(写真4)床は束立ての板床だが雨漏りで不朽が進んでいる。



写真4 石蔵内部

## (3) 規模

サイズは正面(桁行)が9.730m 側面(張間)が5.180m, 石造壁であることを考慮して芯寸法を算出すると、正面(桁行)約五間, 側面(張間)が約二間半とわかり易い設計である。(図1)

## (4) 評価

明治43年建設の建築は、近代建築として歴史が十分であり、その存在が別邸としての威容を支える不可欠な構成建造物であると言える。

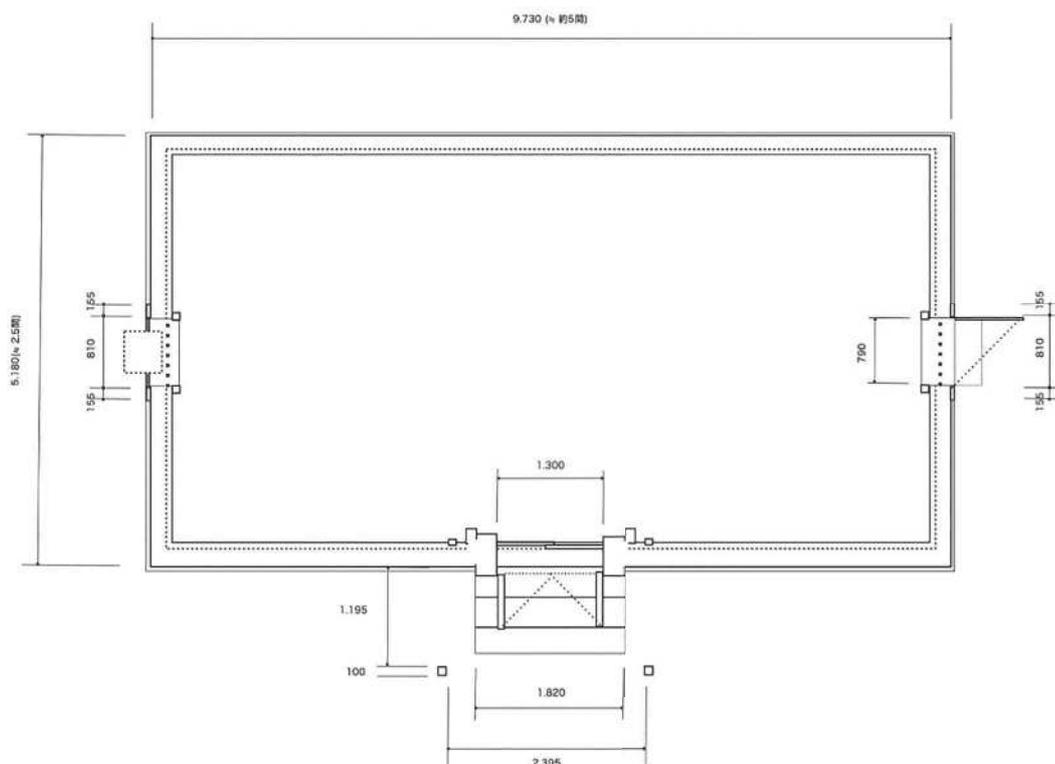


図1 石蔵実測平面図

## 2 歴史的建造物遺構

邸内には主屋西方の石垣境界近くに建造物の遺構群が存在する。敷地境界から約4m離れて煉瓦製3穴釜戸が二基（約2m突き出してレンガ製煙突を付ける）と大小の流し台を備えた炊事場跡（5.9×4.0m）が、その奥で石垣に接するように風呂場跡（4.2×3.1m）そのほか給水塔（径0.8m）小建築物（厠跡か）等が存在する。（写真5, 6）

これらは石蔵同様に天神脇別邸の生活を外から支えた施設を実感できる遺構群と言える。

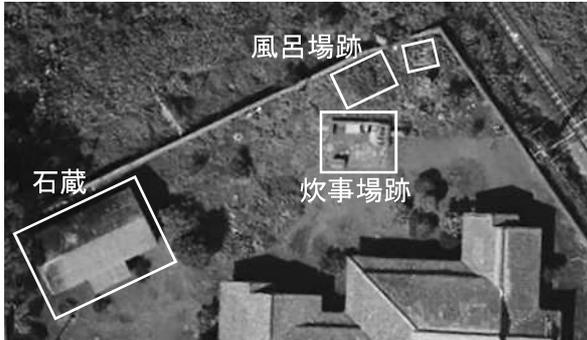


写真5 建築物遺構



写真6 手前が炊事場跡 左奥が風呂場跡と給水塔

## 3 石の工作物

邸内には和風建築の庭園等を飾りつけるために必要な石の工作物が残っている。まず、石灯籠が数種存在する。単独で自立して存在を主張する春日灯籠と和風庭園の要所に置かれて庭木や池水との関係を楽しむ置灯籠である。そして、関係する人物や事蹟に関連して置かれた五輪塔である。さらに、池水庭園に多用される手水鉢などが存在する。

石垣が地所を囲んで別邸の領域を主張する長大な存在である。ただ、本所の石垣は積まれた時期が多様で傷み風化が激しい部分もあり、今報告では詳報しない。



写真7 春日灯籠と五輪塔



写真8 希少な蓮華寺型灯籠



写真9 置灯籠



写真10 手水鉢

#### 4 杉戸絵

杉戸絵は、主屋の表座敷の広縁と奥座敷を隔てる建具として嵌め込まれた杉材を用いた引違の板戸上に直接描かれた、縦164cm、横84.5cmの絵画である。肥瘦線であらわされた樹木や土坡の表現、水流の描き方、画題の選び方に、江戸時代を通して武家屋敷を飾ってきた伝統ある狩野派の絵画様式が見られる。表座敷側に紅葉双鹿図と奥座敷側に松鷹図と異なる画題が描かれており、空間の用途に応じた意匠の使い分けが見て取れる。保存状態は、経年による若干の傷は見られるものの、剥落等は少なく概ね良好である。引手は真鍮製で牡丹の花が毛彫りされている。



写真11 表座敷側：紅葉双鹿図

##### (1) 表座敷側：紅葉双鹿図<sup>もみじそうろく</sup>

表座敷側には、色づいた紅葉の樹下に、後ろを振り返る雄の白鹿と後に続く雌の鹿が描かれている。水辺には野菊、雄鹿の上方には、飛ぶ翡翠<sup>かわせみ</sup>も描かれ、背景には瀧が配されており、秋の水辺の清涼な空間を演出している。つがいの鹿を描く双鹿図は、室内装飾の絵画として多く描かれてきた画題である。特筆すべきは、雄鹿を神聖な「白鹿」として表現している点と、全体の構図である。これらは島津家本邸に現存する杉戸絵の『紅葉双鹿図』と近似しており、制作にあたって本邸の画題を意識した、あるいは粉本（手本）を共有していた可能性が示唆される。大願成就を意味する翡翠、延命長寿と孝行の象徴である野菊、寿老人の使いであり長寿の象徴である白鹿、「双禄」に通じ、重なる福を表す夫婦の鹿は、吉祥図様<sup>きつしょうず</sup>である。単に秋の風情（紅葉に鹿）を描いただけではなく、「家の繁栄」「主人の長寿」「夫婦円満」を願う画題であり、客を迎える表座敷にふさわしい静謐で典雅な趣を備えている。



写真12 奥座敷側：松鷹図

鹿の体軀は、胡粉や墨の細い線で体毛がくまなく緻密に描き込まれている点や、瀧の水流が白と紺の混色を使って全体的に塗りこめられている点は、島津家本邸の『紅葉双鹿図』との違いも見られる。

##### (2) 奥座敷側：松鷹図

一方、奥座敷側には、老松に留まる鷹が大きく描かれている。足元には勢いのある波濤が表現されており、静止した鷹の凝縮されたエネルギーと、荒々しい波の動勢が対比をなしている。古来、鷹は武威の象徴として武家で好まれた画題であり、常盤木の松は家の永続と繁栄を意味している。荒々しい波濤を組み合わせることで、より一層の力強さと緊張感を空間にもたらしめている。

松葉の描き方は、緑と胡粉の細い線であらわされており、特に胡粉の立った使い方が見られる。鷹の描き方も(1)の鹿と同様、細い線で緻密に描き込まれている。

(3) 制作年代および作者についての考察

作者については、奥座敷側「松鷹図」の画面左端に一行の墨書と落款と思われる痕跡が認められるものの、肉眼による観察および赤外線撮影による調査においても判読は不可能であり、特定には至っていない。

しかし、その確かな筆致と画面構成力の高さから、一定の修練を積んだ職業絵師の手によるものと推測される。画風や建物の建築年代を考慮すると、制作時期は近代（明治期）と推察される。特に表座敷側の図様が島津家本邸の杉戸絵と共通する点は重要であり、島津家とゆかりの深い絵師による制作の可能性が高く、地域美術史の観点からも興味深い資料である。



写真 13 松鷹図左端 墨書

(4) 評価

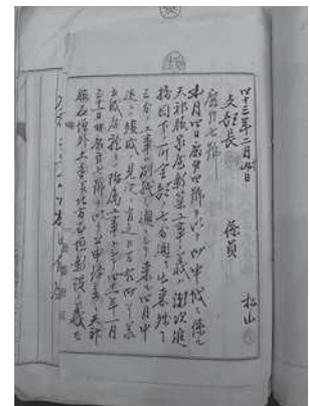
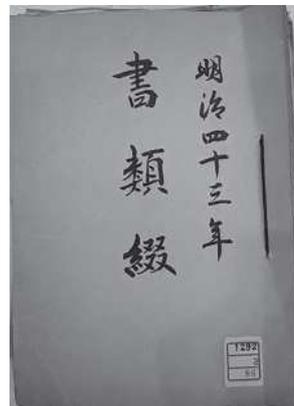
本杉戸絵は、旧島津家別邸の空間構成において、室内装飾としての重要な役割を果たしている。座敷側の「松に鷹」が示す威厳と、廊下側の「紅葉双鹿」が醸し出す穏やかな情緒の対比は、旧藩主家の近代和風住宅における空間演出の意図を明瞭に伝えており、建物と一体となって保存・活用されるべき文化的価値を有していると認められる。

注 呼称と建設年

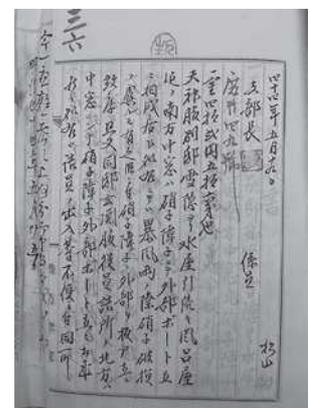
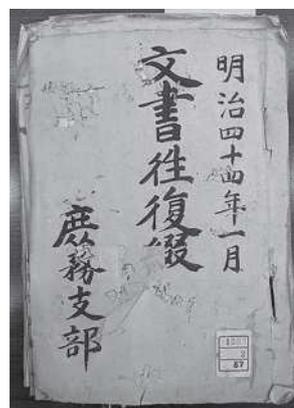
呼称「旧島津家別邸」を「旧島津家天神脇別邸」に改めた。これは刊行後尚古集成館から寄せられた呼び名と建設年に関する新規情報に従って調査・確認した結果である。

変更の根拠は、同館所蔵の「明治四十三年書類綴」（資料1）と「明治四十四年一月 文書往復綴 庶務支部」（資料2）である。

前者では冒頭2月10日に「天神脇家屋新築工事ノ義ハ漸次進捗目下ノ所全部ノ七分通り出来」とあって「残り三分ノ工事に別紙之通ニシテ来ル四月中迄ニハ竣成ノ見込ニ有之候」として石蔵を含んだ「残業」予定を報告している。同年5月11日天神脇家屋新築工事費の精算報告に「客月三十日ヲ以テ落成致候」とあるが、その呼び名は依然「天神脇家屋」である。「天神脇別邸」の出現は「文書往復綴」（資料2）の明治44年5月19日付けの台風被害報告の初行に「天神脇別邸」という呼び名が初めて出現する。これ以後は「天神脇家



資料 1 表紙と2月10日付記事



資料 2 表紙と5月19日付記事

屋」を「天神脇別邸」と呼称したことがわかる。「天神脇別邸」の建設竣工は明治43年4月30日であり、石蔵も同じ明治43年に新築されたことが本資料にて明らかとなった。

なお、時の当主は第30代島津忠重であり、29代で父忠義の側室であった久と忠重が実際にここに滞在したことが写真（資料3）に報告されている。



資料3 忠重滞在写真

#### 参考資料

- 資料1 「明治四十三年 書類綴」 尚古集成館所蔵 管理番号 129, 2, 86
- 資料2 「明治四十四年 文書往復綴 庶務支部」 尚古集成館所蔵 管理番号 1293, 2, 87
- 資料3 島津忠重 伊楚子 追想録「しらゆき」 島津出版会 鹿島晃久 昭和53年4月9日

#### 参考文献

- 文献1 「鹿児島県文化財調査報告書第71集」 鹿児島県教育委員会 令和7年3月 PP. 7-12 「旧島津家別邸」
- 文献2 「鹿児島県の近代和風建築 鹿児島県近代和風建築総合調査報告書」 鹿児島県教育委員会 平成29年3月 PP. 24-25 「4 島津別邸 (No. 3872)」

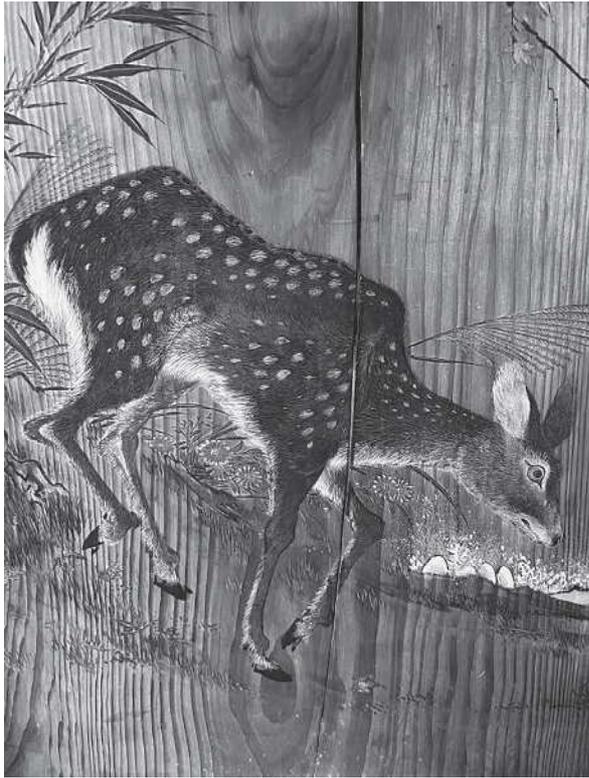


写真 14 紅葉双鹿図 雌鹿



写真 15 紅葉双鹿図 雄鹿



写真 16 松鷹図 松



写真 17 松鷹図 鷹

# おかの 岡野遺跡の人形・土馬に伴う容器について

## —伊佐盆地一帯の土馬および人形に関する追加調査報告—

県文化財保護審議会委員 中村 直子

### 1 はじめに

令和6年度に、伊佐盆地一帯で出土している奈良時代から平安時代のものでされる土製の人形（人形代）・土馬について調査を実施した（中村 2025）。人形・土馬がともに出土する地域は鹿児島県内では伊佐盆地に限られており、奈良時代以降の新たな祭祀形態の導入を示す事例と考えられる。

なかでも岡野遺跡の出土品は1964年の発見と伝えられているが（新東 1978）、土製人形・土馬・土版がそれぞれ10点ずつ「土師甕」に納められ直径約60cmの円形石囲に木炭が充填された施設の中心部に据えられた状態で発見されている。奈良時代の火葬墓と考えられてきたが、時期認定の根拠となりうる唯一の遺物である土師甕は典型的な奈良時代の甕形態とは異なっており、その時期および容器の性格には再検討の余地が残されていた。人形および容器等に伴う木炭について放射性炭素年代測定を行った結果、暦年代で8世紀初頭～9世紀後半(2 $\sigma$ )の値が得られている（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 2025）。この年代からも、当該遺構は奈良時代から平安時代前期に位置づけられるが、容器が古墳時代土師器甕にも類似することから、筆者は伝世品使用の可能性も想定した。

本稿ではこうした点をふまえ、改めて容器について詳細な観察を行い、その時期と器種について検討する。

### 2 岡野遺跡容器の観察

容器については、3次元スキャナ（Artec3D社 Artec SPIDER）により計測を行った。図には、陰影図と実測図を示す。

容器は土師質で、頸部がやや窄まる球胴状を呈し、底部はややふくらむ平底である。底面には直径約0.5cmの焼成前穿孔を6個有する。口縁部は全周にわたって欠損しており、人形等を収納する際に意図的に割り取られた可能性が高い。外面上部にはヨコハケが巡り、回転台の使用が示唆される。外面下部は縦および斜め方向のハケによって下半部一帯が覆われているが、上半部のヨコハケが下半部ハケより後である。

図中の正面・裏面の陰影図を見ると、胴部最大径部から下方にかけて連続した平坦面が形成されていることがわかる（実測図の外表面点線部）。一方、内面下半部にはユビオサエ状のやや深い窪みが多数認められる。このことから、外面の平坦面はタタキ痕であり、内面の窪みは叩き締めの際に内側から添えた指あるいは石などの痕跡であると推定される。

以上から、岡野遺跡の容器はタタキ技法によって成形されたのち、外面器面をハケ調整によって整えたものであり、その過程で回転台が使用されたと考えられる。

同時期かつ同形の類例は確認できなかったが、伊佐盆地出土の同時期土師器の中に、器形および製作技法において類似する資料が認められるため、以下にそれらを紹介する。

### 3 大迫遺跡小壺と山下遺跡甕との比較

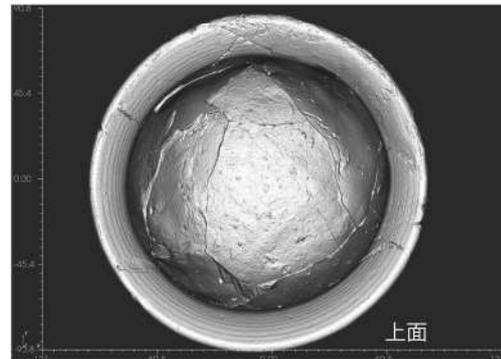
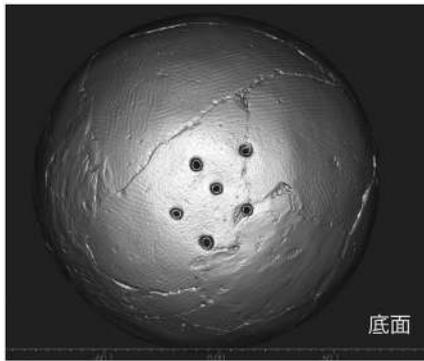
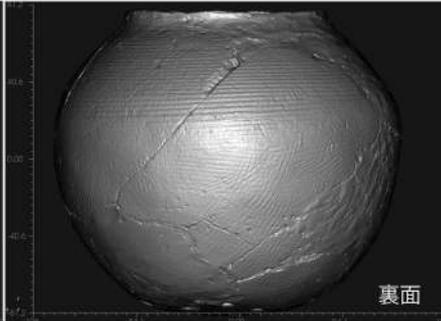
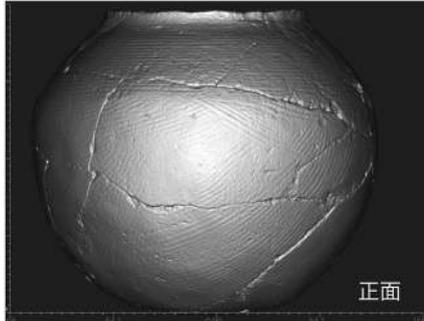
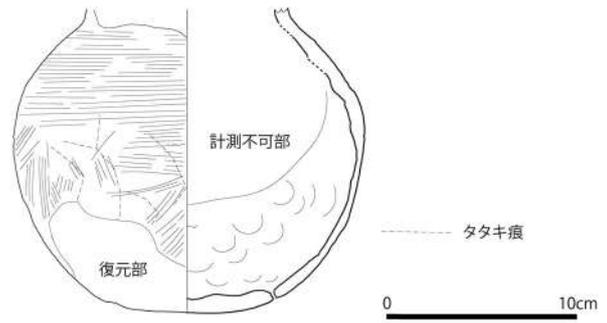
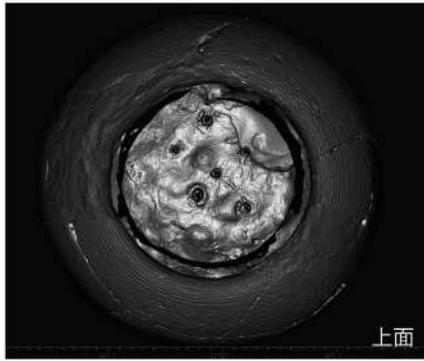
大迫遺跡は、岡野遺跡と同様に土製人形が出土した遺跡であり、共伴遺物として土師器の蔵骨器・坏・小壺などがある。このうち小壺は短頸で、やや口縁部が外反する。体部立ち上がりが明瞭な平底壺であるが、頸部から胴部下半にかけてのプロポーシオンは、岡野遺跡の容器とよく似ている。ただし、大迫遺跡小壺では回転ナデが顕著であり、ロクロ水挽き技法による成形と推定される点異なる。

山下遺跡は、平安時代前半期（9～10世紀ごろ）のピット群が検出された遺跡である。図中3に示した甕は、その一つのピットに埋納された状態で出土したものである。口縁部は短く外側に開き、最大径部は頸部付近に位置する。全体としてやや長胴の丸底を呈する。外面下半部には縦・斜め方向のハケが、その後上半部に横ハケが施されており、内面調整はヘラケズリによる。外面のハケ調整の方法は、岡野遺跡の容器とよく類似する。

以上の点から、岡野遺跡の容器は、伊佐盆地で確認される9世紀前後の土師器にみられる器形および製作技法と共通点を有しており、同時期の土師器短頸壺に位置づけられると考えられる。そのうえで、底部の穿孔は、祭祀利用を前提として製作段階から意図的に設けられたものと推定される。

#### 参考文献

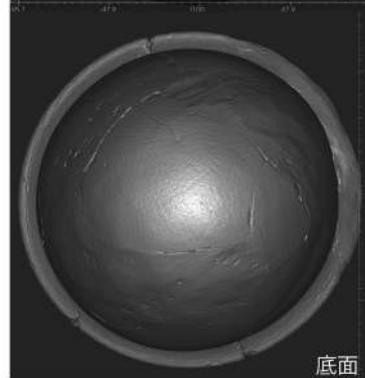
- 新東晃一（1978）「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」『古代文化』30巻2号，1-18頁，  
古代学協会
- 中村直子（2025）「伊佐盆地一帯の土馬，人形，土版および関連遺物」『鹿児島県文化財調査報告書』  
第71集 26-30頁
- パレオ・ラボ AMS年代測定グループ（2025）「伊佐盆地一帯の土馬，人形，土版および関連遺物  
付編2 放射性炭素年代測定」『鹿児島県文化財調査報告書』第71集 33-34頁



1 岡野遺跡容器(土師器壺)



2 大迫遺跡土師器壺



3 山下遺跡土師器甕

※3D計測データから作成した陰影図(縮尺は1/4に統一)